

潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索 ▶
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第303号
平成21年1月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp

賀正



盆画：小島とよ子

心清くして

語り

そして 行わば

福染は離れない

影が

身体に従うように

汚れた心で

語り

そして 行わば

労苦が纏い付く

車牽く牛の足跡に

車輪が従うように

また

新たな一年が始まる

清き善き心で

語られよ

そして 振る舞われよ

十牛図

今号は、丑年うしにちなみ十牛図じゅうごうずを取り上げさせていただきます。

これは文字どおり「十の牛の図」ということでありますが、単なる牛の絵が十種描いてあるわけではありません。牛が描いていないものもあれば、半分だけ、あるいは何も描いてないものまであります。それぞれに、奥深い意味がありそうです。それもそのはず、禅の修行者（青年）が、十のプロセスを経て、悟り（牛）にいたる道筋を説き示したものであります。

本来、禅の神髄、自己の面目あるいは悟りを主題としているわけですから、軽々に扱うべきものではありませんが、仏道修行だけにかぎらず、書道・華道・歌道・武道等、道を求める者には、何かしら得るものがあるはずです。そ



の一端ですが、覗のぞいてみることにいたしましょう。

一、尋牛じんぎゅう

画中に牛は未いまだいない。不安げにきよるきよる何かを探す若者。何を探したらよいか、本人にも解らない。力尽きて求むるにところなし。そもそも何を探したらよいかも解らない。

二、見跡けんせき

牛の足跡あしあとを見つける。しかし、牛を見たわけではない。良い言葉を聞くと、判ったような気になるもの。「これだ」と思えも、それは言葉だけの悟りを先取りしているにすぎない。

三、見牛けんぎゅう

牛のお尻をちらっと見つける。右手に綱を持って、見つけた牛を捕まえるべく構える。しかし、牛は逃げて行く。これを追えば良い

ことだけが解っている状態。

四、得牛

ようやく牛を捕まえるが、牛は暴れて逃れんとする。双方、離れ、かつ、離すまいと、綱がピンと張っている。深い境地に遊ぶような心境を体験することもあるが、すぐに深い妄想の中にこの牛は居座ってしまう。

五、牧牛

紐で結んで、牛の先を歩く。牛は素直になつて青年に従う。綱は緩んでいゝ。自己の中の葛藤が無くなり、牛が馴染んでくる。牛の示す方向に進んでいゝとも見えぬ。しかし、まだ、綱が付いていゝ。油断すると本来の自己が、また逃げる。

六、騎牛帰家

牛をつなぐ紐はない。牛の背に乗って笛を吹く。楽しみに先へ進

む。遙か彼方に思いをはせ、安らぎの「家」を想う。自分と自分の居場所とも調和し、周囲とも調和した状況。ただ、ここでいい気持ちになつて、停滞する危険性が隠されている。

七、忘牛存人

この図では、牛が消えている。牛は、青年の胸の内にいる。家の外に出て、「修業のお陰でここまで来た」と、遠い山の彼方の月を拜んでいる。ところが、「一体になつた」と思う己が心の中に潜んでいる。ここまで来ると「これだ悟つた」と思うが、自惚れである。

八、人牛俱忘

ただの円。自分の姿も、牛もない。家も自分も牛も消え、空円相あるのみ。実は、今までの絵は、すべて円の中にあつた。円は真実を示す。

九、返本還源

青年はいない。老梅樹が川辺に開花している。この絵は、無我性の具現である。梅花は、我ならざる「蘇つた無我の我」である。水は自ずから茫茫、花は自ずから紅。我を忘れて、花になつていゝ。

十、入廓垂手

入廓とは、店の並んでいる街に入る。垂手とは、手をブラブラとしていること。布袋様のような老人と向かい合う青年。二人してぶらぶらと歩く。老人は、自らの過去の経歴・経験も忘却し、青年と一体になり、自分と他者との交わりそのものが、無我（自己ならざる自己）の状態となることを表す。我と汝の二人が、そのまま「我」である。一見患者のごとく、街をさすらい歩き、慈悲を世界にふりまいて生きる姿である。

平成二十一年度年回表

・ 一 周忌	平成二十年	・ 二十三回忌	昭和六十二年
・ 三 回忌	平成十九年	・ 二十七回忌	昭和五十八年
・ 七 回忌	平成十五年	・ 三十三回忌	昭和五十二年
・ 十三回忌	平成九年	・ 三十七回忌	昭和四十八年
・ 十七回忌	平成五年	・ 四十三回忌	昭和四十二年
		・ 四十七回忌	昭和三十八年
		・ 五十回忌	昭和三十五年

懐石かかせき

お茶の席につきものの「懐石料理」。これが分かれていったのが「会席料理」。本来は、簡素な食事を意味することはであり、そのルーツは釈迦しやくかの時代までさかのぼることができる。

当時の修行僧たちの食事は一日一回。いくら修行といっても、これではつらい。そこで彼らは温めた石を腹に当てて、飢えをしのいだという。つまり、石の温度を利

用して、体温の低下、体力低下を防いだというわけだ。つまりは、

懐に石を抱いた状態であり、それが簡素な食事の代名詞へとなっていく。この石のことが「薬石やくせき」。

これ、後には、お粥かゆ、あるいは夕食を指すことばへと変わっていく。『仏教のことば』早わかり事典

雑記

▼阿弥陀堂寄進



新たに次の方からご応募ください

きました。感謝申し上げます。

・伏谷幸七様 一万円（二口）
▼コムス（ミニカー）

法務中での駐車違反取り締まり対策を思案しており、リール落ちの一人乗り電動ミニカーを見つけた、導入しました。



一応四輪ですが、原付扱いなので経費が少なく済みますし、バッテリーで動き、排気ガスを出しませんから、環境に少しは貢献できるかもしれません。

▼謹賀新年

還暦過ぎて初年。心新たに精進できればと思っております。旧年中は大変お世話になりました。本年も何卒宜しくお願いいたします。

◆人も世もただ無事願ひ

初もつで 沐魚